

計劃言語とピジン・クレオール

Planned languages and pidgin-creole languages

千田 俊太郎

Syuntarô Tida

京都大学

Kyoto University

Abstract: Since Schuchardt, a number of similarities between planned languages and contact languages have been pointed out. While many of these newly born languages are short-lived, some survive for longer and are then subject to measurement of their degree of “linguageness” by linguists, mainly based on a native-speaker-centric perspective of a speech community, although norm-setters of a language can sometimes be non-native (Mufwene 2001). This paper examines past studies on planned languages and pidgin-creole languages and suggests that a reconciliation of different views presented in the field of language contact might be possible with a simpler definition of pidgins as an extreme type of common language and creoles as an extreme type of language variety which owes its origin to language shift, relativizing the concept of degree of contact in much the same way as is the case with the notion of relative artificiality commonly found in interlinguistics.

Key words: pidgin, creole, contact languages, planned languages, Schuchardt

1. はじめに

Klimow (1973: 238) は、ピジンやクレオールが誤つて「人工語」と呼ばれる場合があると指摘してゐる。実際に、Couturat & Leau (1903: 280) にリング・フランカ、ピジン英語、チヌーク語を「自然形成による人工言語」(langues artificielles de formation spontanée) といふ表現が見えるのは計劃言語の専門家たちの筆の誤りであらうか。ピジンが「發明された」といふ表現を使つた者に對してHall (1955: 104) はピジンを含む全ての「普通の」(normal) 言語は數世代の話者たちの集合的な創造物であると反論してゐるが、別の著作ではエスペラントをロマンス語ピジンだとしてゐる (Hall 1958, 1964: 457)。後者ではエスペラントも話者たちの集合的な創造物であるといふ主張は意圖されてゐないのだらう。クレオールの出現について論ずる文脈で、「創造」(creation)、「創造する」(create)、「創造者」(creator) といふ表現を使ふ論者がゐるが (Lefebvre 1998, McWhorter 2018)、言葉の綾とでもいふべきか、特定の個

人の作爲を意味するのではないらしい。言語學史を遡れば、シューハルトやイエスベルセンといったピジン・クレオールに関心をもった言語學者が、國際補助語の計画にも關はつた例がある。ピジン・クレオールも計画言語も「新たな言語」として産聲を上げ、短命に終はるものが少なからず存在するといふのが根にある共通点であらうか（和田 1973）。

本稿では接觸言語と計画言語をともに取り上げる議論を紹介した上で、接觸言語と計画言語の語られ方の類似をいくつか指摘したい。

2. 接觸言語と計画言語をともに取り上げる議論

Schubert (1989a) によると、ピジン・クレオールと計画言語の類似性の指摘は、Dénes Szilágyiが1931年にラティノ・シネ・フレクシオネと呼ばれる簡略化されたラテン語で発表した論文（筆者未見）を嚆矢とするといふ。これはさらに遡つてSchuchardt (1888) の計画言語のヴォラピュクを擁護する論における議論が始まると見るべきではないだらうか。そこでは計画言語の出現とクレオールの發生が原理的に同一であるといふ主張が展開される。Schuchardt (1888: 7-8) は、ポルトガル語クレオールの文法的時間表現が分析的である例を挙げ、このやうな變化は「徐々に、意志によらずに」(allmählich und unwillkürlich) 發展したのではなく、ポルトガル人が謂はばヴォラピュキストとして、「現地人のために自身の言語を破壊し、修繕し直した」とする。「言葉を崩して話すこと (Radebrechen) は、學ぶ側だけでなく、教へる側にも起こる」といふクレオールのForeigner talk起源説である。そして、計画言語とクレオール（さらには、ロマンス諸語）との違ひは「より廣い基盤と考へ抜かれた計画にしかない」。言語變化が時には人間の意志による言語改變 (Sprachveränderung) により引き起こされるといふ考へ方である。Jespersen (1922) はSchuchardt (1888) の議論を把握してをり、ビーチ・ラ・マールやピジンに見られる「正しい英語」からの逸脱、發音轉訛、文法簡化は、多かれ少なかれ「人工的」な非道 (perversions) により正しいことばの完全習得が遲滞したことに起因するとしてゐる (p.225)。この系統の考へ方は、Bloomfield (1933: 472) によるジャーゴン「赤ちやん言葉」説にも通じるものがある。

關聯する議論として、19世紀の後半には青年文法學派もすでに標準語論を扱つてゐるし、人間の意志が言語に入り込むことは、Meillet (1928) も指摘してゐる。この節では接觸言語と計画言語がともに取り上げられたことのある論點について紹介し、若干の考察を加へたい。

2.1 系統論

Hjelmslev (1938) やHall (1958) はクレオールが今日のいはゆる語彙供給言語との系統關係において、直系とみなしうることを論じてゐる。このことをピジン、クレオール、計画言語

を並べて同断と論じるのがHall (1958, 1964: 457) であり、上に引用したエスペラントをロマンス語ピジンだとするのはこの文脈においてである。ここでの一次的な主張は、エスペラントのピジン性ではない。ピジン・クレオールやある種の計画言語を言語の系統論から排除する不相当性を訴へるものと見ても良い。なほ、現代的なクレオール化の定義を行つたHall (1962) でも「語族は初期のピジンがクレオール化したものとして始まつた場合がありうる」と立場は變はつてゐない。もとより、方言や言語變種のうちに、内發的分化により形作られたもののみならず、音聲言語の乗り換へにその起源をもつものを含める (Sapir 1931) のはごく普通に行はれることであり、シューハルトならずともロマンス諸語とロマンス語クレオールを系統的に別扱ひする習慣に異を唱へたくなる向きがあつても不思議はない。

Jespersen (1922) はビーチ・ラ・マールを西太平洋人と、ピジン英語を黄色人種と結び付けて論じ、これらは(混入物が極めて少ないため)しかるべき意味での「混合語」ではなく、「英語であり、英語にはかならない」(p.224) とし、これらの言語が、嫡子でないことや純血でないことを意味する度の過ぎた表現で喩へられることについて、言語が「有機體」であるかのやうな印象を與へるため避けるべきだと述べてゐる。系統論については明言してゐないものの、親に對して實の子を突き付けた體にも見える。人種と言語の結び付けや、これらが「正しくない」變種だといふ言ひ方は今では通用しにくいことはおいても、かつて、形態法中心の文法から統語法中心の文法へと移行することこそが言語の進歩 (Jespersen 1894) と看做した著者が「ピジンとその同屬」の文法を進歩と把へず、またメラネシア島民の「英語」は「正用に近づいていく」(p.285) と豫測したのは不思議である。

ほかにもクレオールを語彙供給言語の「方言」に位置付けるものが過去にはあるが (cf. Bloomfield 1933: 474)、このやうな立場は今日では異端的とも映るかもしれない。Thomason & Kaufman (1988) の a break in (normal) transmission といふ言葉に象徴される、接觸言語における言語系統の斷絶は、言はずもがなの了解事項になつてゐるやうでもある。しかし、現在の論客の中にも、接觸言語を「孤兒」扱ひし、語彙供給言語の「嫡子」と認めないのは理不盡だと考へる向きもある (DeGraff 2005, Mufwene 2001)。Noonan (2010) は言語の繼承の社會言語史によつて、同じ言語でも親言語との系統關係の認め方が違つてくるといふ變はり種の考へを提出してゐる。このやうな考へが、歴史比較言語學で受け入れられるものか、疑問であるが、これまでの接觸言語論の實情を反映してゐるやうにも見える。

2.2 單純性

Jespersen (1931: 117) は國際補助言語の設計にあつて、最も單純な文法構造を見出すためには、中國語に加へてピジン英語やクレオールなどの間に合はせ言語 (makeshift languages) あるいは最小言語 (minimum languages) に學びうるところが多いとしてゐる。

同様の提案はHall (1950: 225) の議論展開にも見られるが、議論の末に、ピジン英語がさうであつたやうに、英語話者には敵意と拒絶を招くことにならうと結論付けてゐる (p.228)。

ピジン・クレオールを参考にして提案された計画言語は実際に存在する。本稿冒頭の「自然形成による人工言語」(Couturat & Leau 1903: 280) はPasilinguaといふ計画言語の記述に現はれる表現であり、この言語が接触言語に倣つた文法・語彙を提案してゐることを紹介してゐる。21世紀になつてからインターネットで発表され、一定の支持者を得たことで話題になつたトキ・ポナ (Toki Pona) は、ピジン・クレオールを参考にして設計されてをり (Blahuš 2011)、言語名のtokiの部分はトク・ピシンのtok (言葉) に、ponaはエスペラントのbona (良い) に由来する。「良い言葉」である。音素は14個、語彙は100を超える程度であり、語形変化をもたない。

計画言語の類型論では自然言語から材を採つた「後驗言語」とさうでない「先驗言語」に分類する用語法が定着してゐる (Couturat & Leau 1903、タニ 2009)。計画言語の分類法の中にはベーシック・イングリッシュやラティノ・シネ・フレクシオネのやうなものを「ピジン・プロジェクト」と分類するものもあるといふ (Blanke 1985: 109)。「後驗言語」の下位類と考へてよいだらう。ベーシック・イングリッシュは普通の英語としても通用するものであるのに対してラティノ・シネ・フレクシオネは普通のラテン語とはいへないので性格がだいぶ異なるやうにも見えるが、サブタイプがあるにせよ、既存の言語を出発点として簡略化が行はれた部類をまとめるものであらう。サブタイプは、細かいことに目をつぶれば、語彙縮小型と形態法除去型に分けられるやうに思ふ。語彙縮小型の計画言語は少なからず存在し、実際に使用されてゐるものもある。日本では「やさしい日本語」が該当する。

ピジン・クレオールの「単純性」を應用的に利活用するといふ提案は、計画言語以外の分野にもないわけではない。Parkvall & Bakker (2013) は、語學教育において容易に學びうる項目から順に導入して教へるのには、ピジンが参考になるといふ、潜在的な可能性を指摘してゐる。実践例があるかどうか、寡聞にして知らない。

ところで、言語の単純さについては、これまでのピジン・クレオール論においてしばしば言及されてゐるが、Leufkens (2013) は透明性、単純性、獲得の易しさ、規則性といった概念が混同されてきたと指摘してゐる。たしかに「単純性」は、「複雑な概念」(Trudgill 1995: 155) であり、あけすけに言へば少し素人臭い用語にも見えるし、かつて論争になつたごとく客観的な測定は困難である (DeCamp 1977)。しかし、クレオールの単純性を典型的に位置づける試みもある (McWhorter 2001, Parkvall 2008)。そして、もし計画言語にも見られると言はれるクレオールの単純性 (cf. 和田 1973, Morizumi 1989) を典型的に位置づけることが可能ならば、エスペラントを「人工クレオール」(Gledhill 1998: 37, 41) とする議論を検證することが可能になるはずである。

エスペラントをはじめとした計画言語のプロパガンダなどでも、学習容易性が主として謳はれるが、やはり規則性や論理性などとの区別が危ふい場合がある。例へばエスペラントが本當に易しいのか論じるTelle-Bouvier (2008) は“pli facila (regula, logika)” (p.5) 「より易しい(規則的、論理的)」と表現を並べてゐる。

2.3 共通語

Samarin (1970: 661-662) は、リング・フランカについて、言語障壁を越えて使はれる言語を指すもので、言語の種類を問はないとして、自然言語、ピジン語、計画共通語の三種類に分けて記述してゐる。計画言語については、餘剰性の排除などのピジンの特徴を多く示すとしてゐる。Klimow (1973: 239) もピジンが使用の限られた補助言語である點は人工補助言語のエスペラントやイドなどに等しいとする。もちろん、計画言語の中には共通語としてはたらくことを期待されてゐないものも存在するが、言語學者に取り上げられるのは主に國際補助語である。

Jespersen (1931) は媒介言語論 (interlinguistics, 國際語論とも) といふ、計画言語を主として論じる研究領域を開拓した。この分野は、今では、定義によつてはピジンをも含む、民族間コミュニケーションの橋渡し言語を研究する領域として把へることもできるとされる (Schubert 1989a)。日本では木村・渡辺 (2009) などがエスペラントのほか、國際語としても使はれる諸民族語、そしてピジン・クレオールを含む廣い領域をカバーする書籍として、その線での媒介言語論を打ち立てようとしてゐる。ただ、媒介言語論の學術的傳統ならではのピジン・クレオールの分析がなされるといふやうなことは起こつてをらず、媒介言語論がピジン・クレオール學を参照するといふ一方的な關係が見られるやうに思ふ。特殊な分野名をつけることで、計画言語論者による共通語論が却つて遠ざけられてしまつてゐるのではないか、心配にもなる。

エスペラントが民族語からの影響によつて、當初の計画とは獨立に、また話者の意識下にもあつたとは思はれない文法を發展させた點については、稿を改めて論じる準備があるが、國際補助語は必然的に言語接觸下の展開を餘儀なくされるのは當然のことではある (cf. 後藤 2009)。

2.4 母語話者との關係

Brugmann (1907: 25) は民族語であれば、國際的に使はれても母語話者が規範 (Norm) であり續けるとして、全て「生きてゐる言語」には郷土があるといふ (cf. Baudouin de Courtenay 1907 「言語の故郷は頭」)。そしてエスペラントのやうな計画言語には、大洋の島にその言語しか話してはならないやうな故郷を用意してやらない限り、規範と規則の據り所がないといふ批

判を展開する。同様の議論はHall (1950: 223) にもみられる。エスペラントについて、使用の規範がよるべき母語話者が少なすぎ、正典とすべき資料群もないといふのである。母語話者中心の共同体がなければ言語が成立しないといふなら、ピジンも言語ではないことになる。

エスペラントの「正典」としては修正を禁じられた「基本」Fundamentoとなる文法、語彙、練習文集のセットがあり、これらがエスペラントに歴史的安定性を與へたといはれてゐる(佐々木 2009)。「基本」は分量としては小さいが、範とすべき書き言葉の資料として、創始者ザメンホフによるヘブライ語聖書などを含む著述家たちの翻譯作品・原作作品の蓄積があつた。エスペラントの最初の本格的な記述文法であるKalocsay & Waringhien (1938) はそれらの言語資料—正確には主としてザメンホフより後の時代の資料—に基づくものであり、ページ数は488に達してゐる。當時すでに、エスペラントの言語表現の慣用はそれなりに定着してゐたものと考へてよい。

母語話者の出現や文學作品の成立の背後には、エスペラントの活動家たちによる「普通の言語」として認めてもらふための取り組みがあつた。ところが、中立的な國際補助語としてはたらくためには、母語話者や文學作品の存在がむしろ障礙になるといふ考へ方もできる。Schuchardt (1904: 290) が「[[人工言語は] 母語として植ゑ込まればすぐに自然言語と區別できなくなるだらう」としながら「おそらくはすぐに冷厳な客觀性を失ひ野生の自然言語になる」おそれがあるとするのはそのやうな立場である。Meillet (1928: 326) は「世界中に知られたすぐれた文學作品をエスペラントに翻譯した」エスペランティストは淺はかであつて、「人工語が傳統的な言語にみられる表現や慣用語法の特徴を獲得したときには、そのことによつて、人工語にその存在理由を與へてゐる本質的な長所を失ふであらう」とまで言つてゐる。

いづれにせよ、エスペラントには母語話者が發生してゐる。「母語化」によつて、言語の構造的な變化が起こつたかといふと、二つの事態を關連づける報告は、管見の限りない。むしろ、状況からは、母語化のための構造的な變化は、起こらないといふ豫測をしよう。エスペラント界においては、母語話者が言語の權威とならず、言語共同体に對して模範的な話者としてはたらかないのである (Schubert 1989a: 11, Versteegh 1993)。

接觸言語の研究からも、言語の規範の決め手 (norm-setter) は必ずしも母語話者ではなく、共同体に普通と認められる様式で當該の言語を日常的に話す者 (Mufwene 2001: 106) とする把へ方が出てきてゐる。ピジンとクレオールの違ひについて、話者集團の母語かどうかといふ視點から語られることが多いが、むしろ規範の決め手が母語話者かどうかといふ違ひに求めるべきではないだらうか。ある程度使用實態のある言語には、遅かれ早かれ母語話者は出現する。

接觸言語が母語になることが、言語としての完成の段階に至る進化だと把へたのもSchuchardt (1909: 442-443) に始まる考へのやうである。ここで、彼は「交易言語をクレオールと呼ばない方がいいだらう」としてゐることに注意しなければならない。「クレオール

と呼ばれる」植民地住人の使ふヨーロッパ語變種を、典型的には交易の状況で使はれる「低い段階」にある共通語とは、おそらく母語化の有無とは関係なく區別してゐるのである。

Bloomfield (1933: 474) の場合は「ジャーゴンが問題となる集團の唯一の言語となるとクレオール化した言語となる」としてをり、クレオールに新しい意味を與へた。集團の唯一の言語といふのは「母語」と似てゐるが、単一言語社會を想定した表現になつてゐるのが意圖的かどうか、はかりかねる。ここで「ジャーゴン」は、Bloomfield (1933) の用語法では「上位言語の簡化された「赤ちやん言葉」版」が獲得された結果が「慣習化されたジャーゴン」(p.472) といふ關係で定義されてゐる。Bloomfieldのいふ「クレオール」は、言語を指す用語としては曖昧な部分がある。Bloomfield (1933) の索引にはcreolizedが項目に擧がつてゐるが、creoleはなく、僅かに第19章「方言地理學」でCreole Dutchに言及があるのが見え、言語名として頭文字を大文字にしてある。先の定義は、このやうな、言語名にcreoleが入る言語が、前史として「ジャーゴン」の段階を経たといふ假説とも取れてしまふ。

3. 語られ方の類似

3.1 出現時期の特定可能性

Bickerton (1981) の冒頭で出現時期が可能な言語群としてピジン・クレオールがリストされる書き出しが印象に残つた読者は多いのではないか。Muysken & Smith (1994: 4) などもクレオールは特定時點に出現したことが通常の言語と異なるとしてゐる。ある言語が接觸言語だと特定されるのは、一般的に、社會・言語的な形成史がある程度明らかである場合である。普通の歴史的發展が漸次的であるのと對照的に、比較的短期間で形成された (cf. Thomason and Kaufman 1988: 10) といふことも、接觸言語を特定する基準に含まれる場合があり、關聯する事情である。

Couturat & Leau (1903) は計劃言語を對象にした博言集であるが、目次を見れば一目瞭然、發表年が正確に特定されてゐるものが多く、發表順に構成されてゐることが分かる。計劃言語の發表年はもちろん言語共同體の發生を含意しない。計劃言語の發表年が一意に定まるとも、一概には言へない。ザメンホフは1908年のドレスデン演説で、「エスペラントが友人の小さな集まりにおいて初めて現はれてからちやうど30年がたつた」(Dietterle 1929: 385) と言つてゐる。文部省の命で日本代表として參加した新村出はこの言葉を聞いただらうか (新村 1972: 330)。エスペラントの發表は一般にザメンホフがDoktoro Esperantoの筆名でものした通稱『第一書』の出版時點である1887年とされてをり、演説の中の發言とは9年ばかりの差がある。有名なボロフコ宛書翰で、ザメンホフはlingwe uniwersalaといふ名稱の言語について「1878年には言語はおほむねできあがつてゐた」(Dietterle 1929: 420) としてゐるので、ドレスデ

ン演説で言及されたエスペラントの出現時期はこの言語の誕生のことを指してゐると思はれる。ライバル言語のヴォラピュクの発表前にすでにアイデアができてゐたことを示したかつたのが、サバをよんだ理由ではないだらうか。たしかにこの言語はザメンホフ自身の企劃したエスペラント變種といふことができるが、『第一書』以降の、あるいはFundamento以降のエスペラントとは相互理解が困難なほど異つてゐる (cf. Kiselman 2011)。通常はかうした變種はエスペラント前史における、創始者の腹案として扱ふことになるだらう。しかし、エスペラントとの共通点がないわけでもない。

話が脇にそれたやうだが、接觸言語が言語特徴によつて同定できるかどうかはまだ意見の一致は見られないやうであるし、おそらくは計画言語を言語の内的特徴から同定することはできない。出生の祕密が歴史的に暴かれることがなければ、ある言語が接觸や計画に起源を持つかどうか、我々には知りえないことである。逆に、ある言語が接觸言語と呼ばれたり計画言語と呼ばれたりするのは、特定の時期に誕生したことが明らかな場合である。

3.2 「自然でない」出自の相対性

言語がその形成に当たり受けた言語接觸による影響が程度の差に過ぎないことは、言語の「混合性」といふ用語で語られてゐた時代からよく認識されてゐた (Schuchardt 1884, Hall 1958)。「混合語は存在しない」といふMax-Müllerに對してSchuchardt (1884: 5) は「完全に非混合的な言語は存在しない」とし、Hall (1958) は同調しながらも、言語の混合度合には程度差があることを指摘してゐる。今日用語法では、言語は多かれ少なかれ接觸言語であるといふことにならう。言語の形成史は系統論のみによつては語り盡くせない面がある。

接觸言語を扱はうとすると初めに大なり小なり用語について云爲することになる。その當の「接觸言語」であるが、掻い摘んで言へば、言語接觸状況下で新たに生まれた言語とするのが普通のやうである (Sebba 1997: 2, Thomason 2001: 262, Bakker and Matras 2013: 1)。ここで、「言語が新たに生まれる」といふことは、自明の事態ではない。接觸言語には一つ以上の「元」になつた言語が關はるわけだが、どの程度「元の言語」と異つてゐれば別の言語が「新たに」成立したといへるのか、などが問題となる。その上で、言語接觸下だからこそ起こつた特別な言語形成の種類、言語接觸の影響を特定するための判断基準や、程度の測定といふことが問題になる。

かつて接觸言語全般を表はしてゐた「混合語」は、近年では二つの特定可能な言語を親言語として持つ、系統が一つに決まらない言語のことを指すやうになつてきてをり (Meakins 2013)、接觸言語の一部類としてピジンやクレオールとは區別した方が好いだらう。接觸言語の内、この狭い意味での「混合語」の概念だけはその接觸言語特有の特徴を相対化することが難しい。強ひて言へば形態法がない孤立語同士の混合や系統が近い方言同士の融合 (コイナー

化)のやうなものは混合度を低く見積もることができるかもしれない。計画言語を混ぜ込めば、いくつの言語が混合したかといふことも相対的な尺度になる。

ピジンとリンガ・フランカについてはTrudgill (1995: 156-157) が母語としての「元の」スワヒリ語、リンガ・フランカとしてのスワヒリ語、ピジン・スワヒリ語の連続の例を出してゐる通り、共通語のうち接触特徴の多寡により並べて中間にリンガ・フランカ、その極にピジンを位置づけることができる。

クレオールを言語特徴によりあぶり出す試みに、プロトタイプの定義を考へる論者がゐる(McWhorter 2001, 2018)。プロトタイプである以上、最もクレオールらしいクレオールが中心にあり、さまざまな程度のクレオールさをもつクレオールが周辺にあるといふ構圖である。ただ、ピジンのライフ・サイクル説を受け入れて主張されるものだから、まづはその説に與するかといふことになるが、問題はそれだけではない。クレオールのプロトタイプとは単なるステレオタイプでないといふ保証はあるのか、議論の餘地がある。この點を見事についたのがDeGraff (2005) である。結局、Muysken & Smith (1994) の言ふ通り、歴史を知らなければクレオールかどうか特定できないのが現状ではないだらうか。ただ、ここでも言語取替の結果、生じた言語變種のうち、言語接触の影響が甚だ色濃いものがクレオールといふあたりはつく。

計画言語の支持者・使用者たちは多く、「自然言語」と「人工言語」の明確な區別が不可能であり、「人工性」は相対的なものに過ぎないと指摘してゐる(Schuchardt 1904: 289, Jespersen 1933: 434, 木村 2005: 438-439, 後藤2009, Benczik 2016)。エスペラントの場合は「後驗」タイプの計画言語であることもあつて、計画言語論に深くコミットしてゐない言語學者その人工性が「ばかばかしいほど強調されてゐる」(Sapir 1933) ことを嫌ひ、この言語が「ヨーロッパの諸言語の平均」に基づく(Meillet 1928: 321-322) としたり、「半人工的」である(Bloomfield 1933: 506) としたりして、その人工性の程度が著しくないものと考えてゐる。たしかにベーシック・イングリッシュなどの下位互換型の後驗言語や言語の標準化變種など人工性の低いもの、エスペラントのやうなものもあれば、既存の言語から採つたところがほとんどないやうな先驗言語もあるため、自然でない出自といつても相対的なものでしかない。しかし、エスペラントをはじめとする計画言語のほとんどが、文字から始まつてゐること(Benczik 2011) はやはり特殊であるやうに思はれる。

3.3 言語の發達段階

言語が段階を経て發達するといふやうな進化論的な言語史觀は、言語學の他の分野ではすでに廢絶されてゐる。これが生き残つてゐるのがピジン・クレオール論と媒介言語論の分野である。

すでに見た、Schuchardt (1909) やBloomfield (1933) に見られる接觸言語の「母語化」の

議論は、Hall (1962) の定式化、すなはち「ピジン」が「言語共同体の第一言語になる」のが「クレオール化」であり、クレオール化を経ると「普通の」言語になるとするピジンのライフ・サイクル説として洗練される。15年後、ライフ・サイクル説は「今や一般的に受け入れられてゐる」(DeCamp 1977:11) とされ、今日に至るまで、最もよく受け入れられてゐるピジン・クレオールの定義になつてゐる。この定義はBloomfield (1933) のクレオール化の議論に見られた単一言語社会へのバイアスが見られない点などが前進したとも言へるが、「ピジン」や「クレオール」と名付けられ、その名称が定着してゐる諸言語がすでに存在してゐたことも忘れてはならない。このことはあまり広く認知されてゐないやうに思ふ。言語名が用語としての定義に合はない場合がでてきてをかしくない事態なのである。ライフ・サイクル説に反対する議論 (cf. Chaudenson & Mufwene 2001) が絶えない大きな一因になつてゐるやうに思はれる。個別の接觸言語に即して、ピジンの段階を経なかつた「クレオール」が存在するなどといふ本来ありうる議論が (cf. Mufwene 2021)、定義上封じ込められてしまふことになる。

母語話者をめぐる問題も解決しない。例へば、まだ少数派ではあるものの、トク・ピシンにも母語話者がゐることはよく知られてゐる。かうした、ある人にとっては母語であるが、第二言語話者が相當な比重をしめる言語が「ピジン」なのか、「クレオール」なのか、非母語話者には「ピジン」で母語話者には「クレオール」なのだとしたらそれは違ふ言語なのか。

計画言語論では、Blanke (1985: 107-108) の I. 計画言語案、II. 半計画言語、III. 計画言語の三大分類とそれらを細分して總18の段階 (Blanke (1989) では19段階) を設けて論じたものがよく参照されてゐる (cf. 白井 2009)。900を超える計画言語の企劃が出版 (I-1) のみで終はつてゐるといふ。計画言語の最終段階の5つを挙げると、14. 大規模な国際イベント、15. ラジオ放送、16. 話者の社会・政治的分化、17. 独立した青年運動、18. 家庭内言語として使用 (子供の二言語使用) といふことになる。計画言語の「運動」といつても活動の外部の世界でなかなか実感はわからず、また30年前の研究なので少し時代を感じさせる。今ではWikipediaの記事数や、語学学習サイト、SNSサイトでの表示言語の選択肢、人気Youtuberの存在といった、インターネット上での使用状況も俎上にのせるべきところかもしれない。

ここで、Blanke (1985) の設けた「最終段階」が二言語使用であつて単一言語使用ではないことと、使用状況の段階を設けて評価すること自体に留意すべきである。言語としての完成がモノリンガルの発生とみなしてゐないものの、母語話者の発生には意義を見出してそこに向かふ道筋を発達段階と考へてをり、他の発達段階が、ほぼ純粋な、言語の使用ドメインの拡大と結び付けられてゐるのに対して最終段階には母語話者の発生といふ条件が組み込まれてゐるわけである。

母語として話す人のゐる言語は、言語として完全無缺であるはずだといふことは、證明することはできないかもしれないが、現代に生きるほとんどの人のもつ価値観になつてゐる。しか

し、ある言語（例へばエスペラント）が母語話者を有する故に言語としてまつたうであるといふ論法（cf. Parkvall 2008）は、個人と言語との関係の話を個別の言語の特徴として語る飛躍である。また前提の論理的な裏として、ある言語が母語話者を有しない場合は言語として缺陷を有するに違ひないといふ含意まで勘繰りたくもなる。そもそもピジンのクレオール化といふライフ・サイクルの議論もさうした考へから生まれたのではないだろうか。

エスペラントなどの計画言語とピジンの共通点は、むしろ母語話者に規範の決め手となる權威がない、あるいは母語話者の話す變種に威信がないといふ點ではないだろうか。

3.4 言語の説明

ピジン・クレオールや計画言語と同様、言語であることの説明が課された言語群に手話がある。手話にとつての言語の説明は、二重分節の存在を核にしてゐたことで知られる（cf. Stoekoe 1960）。手話は、母語話者がゐることが明らかであつた點で、ピジン・クレオールや計画言語と異なる。ピジン・クレオールや計画言語の場合は、二重分節の存在はむしろ自明でさへあるのに、言語性が疑はれてきたのである。

Meillet (1928) の指摘する通り、エスペランティストたちは翻譯・原作文學作品を大量に生産した。その姿は自分たちの言語が言語であることを説明しようとしてゐたかのやうにも見える。種々の文藝作品の創出は、言語の使用ドメインの擴大への直接・間接の寄與であつたといふ意味で、上述の「發達段階」を進めたことは間違ひない。また、母語話者が実際に生まれるほどの使用者を獲得したのは文筆活動を含めた「運動」の成果でもあらう。かうした努力は消滅危機言語の再活性化の目論見（木村 2005）にも参考になることが多いやうに思ふ。思へば多言語社會における弱い言語の使用ドメインの縮小も言語としての存在を危ふくする要因である。しかし、文化相對主義的な價值觀の滲透以後、民族語であればいかに弱い言語であつても、またドメインが縮小したとしても、言語であること自體が疑はれることはないのではないか。

計画言語のみならず、ピジン・クレオールも、言語として缺けてゐるものがあるのではないかと、あら捜しをされてきたところがある。接觸言語の中では特にピジンが使用領域や機能が限られてゐると指摘されてきた。そのやうな議論に對し、Hall (1950) はメラネシアのピジン英語が独自の「本當の言語構造」をもち、れつきとした言語であると論じてゐる。トク・ピシンの言語としての地位向上にさらに寄與したのはHall (1955) だと思はれる。トク・ピシンはピジンであつても使用ドメインに制限がなく、言語として完全であるといふ見解がコンセンサスを得ると、この例外をピジンとクレオールの二項對立に押し込めることができなくなつた。「擴張ピジン」(Todd 1975) などといふことばを作つたり、「ピジンクレオール」(Bakker 2003) と呼んでみたりすることが起こつてゐるが、普通の言語だといふことになつたら特殊な名稱が必要になるといふ事態が腑に落ちない。Hall (1962) が作つた枠組の不備による自繩自

縛の状態なのか、あるいはピジンの烙印を押されると、特殊性の色は消すことができないのか。

をはりに

計劃言語にも、エスペラントのやうに持続的に使用される状態に至つたものがある。ピジン・クレオールなどの接觸言語とともに、その出自と外見のために過激な比喩で「不自然さ」を糾弾され、正統な言語であることの証明を課せられた歴史を持つことにおいて共通してゐる。そしてまた言語としての「單純性」に加へ、母語話者中心社會や單一言語社會を基準とした無理解にさらされた點においても類似性を示す。ピジン・クレオールの議論の中に、根據が不十分な前提が根強く残つてゐるのではないか。ピジンは共通語の一種であり、クレオールは言語取替によつて生じた言語變種的一種である。どちらも言語接觸による大きな影響を受けた、おそらくは極端な、あるいは特定のケースを指す。媒介言語論が計劃言語の人工性を相對化してきたのと同様、接觸言語の接觸の度合も相對化して、このやうなシンプルな定義から仕切り直しても構はないのではないだらうか。

謝辭

英文要旨にアドバイスをいただいたアダム・キャット氏、また急なやり取りに懇切丁寧なお答へをいただいたシモン・グジェラク氏に感謝いたします。

参考文献

- Bakker, Peter. (2002) Pidgin inflectional morphology and its implications for creole morphology. In Booij, Geert and Jaap van Marle (eds.) *Yearbook of Morphology*, pp. 3-33, New York: Kluwer.
- Bakker, Peter and Yaron Matras. (2013) Introduction. In Bakker, Peter and Yaron Matras (eds.) *Contact Languages: A Comprehensive Guide*, pp. 1-14, Berlin: De Gruyter Moutton.
- Baudouin de Courtenay, Jan. (1907) Zur Kritik der künstlichen Weltsprachen. *Annalen der Naturphilosophie* 6, pp. 385-433.
- Benczik, Vilmos. (2011) La esperanta literaturo tra la lupeo de kelkaj lingvotektoroj kaj literaturkonceptoj. In Kiselman, Christer (ed.) *Esperanto: komenco, aktualo kaj estonteco. Aktoj de la 33-a Esperantologia Konferenco en la 95-a Universala Kongreso de Esperanto, Havano, 2010*, pp. 9-28, Rotterdam: Universala Esperanto-Asocio.

- Benczik, Vilmos. (2016) *Pri la Natureco kaj Artefariteco de Lingvoj kaj aliaj Studoj*. Budapest: Trezor.
- Bickerton, Derek. (1981) *Roots of Language*. Ann Arbor: Karoma Publishers.
- Blahuš, Marek. (2011) Toki Pona: eine minimalistische Plansprache. In Fiedler, S. (ed.) *Spracherfindung und ihre Ziele. Beiträge der 20. Jahrestagung der Gesellschaft für Interlinguistik*, pp. 51-56, Berlin: Gesellschaft für Interlinguistik.
- Blanke, Detlev. (1985) *Internationale Plansprachen*. Berlin: Akademie-Verlag.
- Blanke, Detlev. (1989) Planned languages — a survey of some of the main problems. In Klaus Schubert (ed.) *Interlinguistics. Aspects of the Science of Planned Languages*, pp. 63-87. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Brugmann, K. (1907) Die neusten Weltsprachprojekte. In Brugmann, K. & A. Leskien. *Zur Kritik der künstlichen Weltsprachen*, pp. 5-29, Straßburg: Trübner.
- Chaudenson, Robert & Salikoko S. Mufwene. (2001) *Creolization of Language and Culture*. London: Routledge.
- Couturat, Louis & Leau Léopold. (1903) *Histoire de la Langue Universelle*. Paris: Librairie Hachette.
- DeCamp, David. (1977) The Development of Pidgin and Creole Studies. In Valdman, Albert (ed.) *Pidgin and Creole Linguistics*, pp. 3-20, Bloomington: Indiana University Press.
- Degraff, Michel. (2005) Linguists' most dangerous myth: The fallacy of Creole Exceptionalism, *Language in Society* 34, pp. 533-591.
- Dietterle, Joh. (red.) (1929) *L. L. Zamenhof, Originala Verkaro: Antaŭparoloj, Gazetartikoloj, Traktaĵoj, Paroladoj, Leteroj, Poemoj*. Leipzig: Hirt & Sohn
- Gledhill, Christopher (1998) *The Grammar of Esperanto: A Corpus-based description*.
- Hall, Robert A. Jr. (1950) *Leave Your Language Alone!*. Ithaca: Linguistica
- Hall, Robert A. Jr. (1955) *Hands off Pidgin English!*. Sydney: Pacific Publications.
- Hall, Robert A. Jr. (1958) Creolized languages and genetic relationships, *Word* 14:2-3, pp. 367-373.
- Hall, Robert A. Jr. (1962) The life cycle of pidgin languages. *Lingua* 11, pp. 151-156.
- Hall, Robert A. Jr. (1964) *Introductory Linguistics*. Philadelphia: Chilton.
- Hjelmslev, Louis. (1938) Etudes sur la notion de parenté linguistique. Première étude: Relations de parenté des langues créoles. *Revue des études indo-européennes* 2, pp. 271-286.
- Jespersen, Otto. (1894) *Progress in Language: with Special Reference to English*. London: Sonnenschein. (イエスベルセン著、新村出譯 (1901) 『言語進歩論』東京専門學校出版部)

- Jespersen, Otto. (1922) *Language: Its Nature, Development and Origin*. London: Allen & Unwin.
- Jespersen, Otto. (1931) Interlinguistics. In Shenton, Herbert N., Edward Sapir and Otto Jespersen, *International Communication: A Symposium on the Language Problem*, pp. 95-120, London: Kegan Paul, Trench, Trubner.
- Jespersen, Otto. (1933) *Linguistica*. Copenhagen: Levin & Munksgaard, George Allen & Unwin.
- Kalocsay, K. & Waringhien G. (1938) *Plena Gramatiko de Esperanto*. Budapest: Literatura Mondo.
- Kiselman, Christer (2011) Variantoj de esperanto iniciatitaj de Zamenhof. In Kiselman, Christer (ed.) *Esperanto: komenco, aktualo kaj estonteco. Aktoj de la 33-a Esperantologia Konferenco en la 95-a Universala Kongreso de Esperanto, Havano, 2010*, pp. 45-107, Rotterdam: Universala Esperanto-Asocio.
- Klimow, G. A. (1973) Sprachkontakte. In Serebrénnikow, B. A. (ed.) *Allgemeine Sprachwissenschaft. Band I: Existenzformen, Funktionen und Geschichte der Sprache*, pp. 236-246, Berlin: Akademie-Verlag. (Ins Deutsche übertragen und herausgegeben von Hans Zikmund und Günter Feudel)
- Lefebvre, Claire. (1998) *Creole Genesis and the Acquisition of Grammar: The Case of Haitian Creole*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leufkens, Sterre. (2013) The transparency of creoles. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 28:2, pp. 323-362.
- McWhorter, John H. (2001) The world's simplest grammars are creole grammars. *Linguistic Typology* 5(2-3), pp. 125-166.
- McWhorter, John H. (2018) *The Creole Debate*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Meakins, Felicity. (2013) Mixed Languages. In Bakker, Peter and Yaron Matras (eds.) *Contact Languages: A Comprehensive Guide*, pp. 159-228, Berlin: De Gruyter Moutton.
- Meillet, Antoine. (1928) *Les langues dans l'Europe nouvelle*. Paris: Payot. (アントワース・メイエ著、西山教行訳 (2017) 『ヨーロッパの言語』 東京: 岩波書店)
- Morizumi, Mamoru. (1989) Simplification in Tok Pisin and Esperanto from the viewpoint of teaching English as an international auxiliary language. 『大妻女子大学文学部紀要』 22, pp. 51-74.
- Mufwene, Salikoko S. (2001) *The Ecology of Language Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mufwene, Salikoko S. (2021) Creoles and pidgins: why the latter are not the ancestors of

- the former. In Adamou, Evangelia & Yaron Matras (eds.) *The Routledge Handbook of Language Contact*, chapter 16, pp. 300-324, Abingdon: Routledge.
- Mühlhäusler, Peter. (2001) Babel revisited. In Fill, Alwin & Peter Mühlhäusler, (eds) *The Ecolinguistics Reader: Language, Ecology and Environment*. London: Continuum.
- Muysken, Pieter & Norval Smith. (1994) The study of pidgin and creole languages. in Arends, Jacques, Pieter Muysken & Norval Smith (eds.) *Pidgins and Creoles: An Introduction*, chapter 1, pp. 3-14, Amsterdam: John Benjamins.
- Noonan, Michael. (2010) Genetic classification and language contact. In Hickey, Raymond (ed.) *The Handbook of Language Contact*, chapter 2, pp. 48-65, Chichester: Wiley-Blackwell.
- Parkvall, Mikael. (2008) The simplicity of creoles in a cross-linguistic perspective. In Miestamo, Matti, Kaius Sinnemäki & Fred Karlsson (eds.), *Language Complexity. Typology, Contact, Change*, pp. 265-285, Amsterdam: John Benjamins.
- Parkvall, Mikael & Bakker, Peter. (2013) Pidgin. In Bakker, Peter and Matras, Yaron (eds.) *Contact Languages: A Comprehensive Guide*, pp. 15-64, Berlin: De Gruyter Mouton.
- Samarin, W. J. (1968) Lingua Francas of the world. In Fishman, Joshua A. (ed.) *Readings in the Sociology of Language*, pp. 660-672. The Hague: Mouton.
- Sapir, Edward. (1931) Dialect. In Seligman, Edwin R. A. & Johnson, Alvin (eds.) *Encyclopaedia of the Social Sciences*, vol 5, pp. 123-126. New York: Macmillan.
- Sapir, Edward. (1933) Language. In Seligman, Edwin R. A. & Johnson, Alvin (eds.) *Encyclopaedia of the Social Sciences*, vol 9, pp. 155-169. London: Macmillan.
- Schubert, Klaus. (1989a) Interlinguistics — its aims, its achievements, and its place in language science. In Klaus Schubert (ed.) *Interlinguistics. Aspects of the Science of Planned Languages*, pp. 7-44. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Schubert, Klaus. (1989b) An unplanned development in planned languages: A study of word grammar. In Klaus Schubert (ed.) *Interlinguistics. Aspects of the Science of Planned Languages*, pp. 249-274. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Schuchardt, Hugo. (1884) *Dem Herrn Franz von Miklosich zum 20. November 1883. Slawo-deutsches und Slawo-italienisches*. Graz: Leuschner & Lubensky.
- Schuchardt, Hugo. (1888) *Auf Anlass des Volapüks*, Berlin: Robert Oppenheim.
- Schuchardt, Hugo. (1904) Bericht über die auf Schaffung einer künstlichen internationalen Hilfssprache gerichtete Bewegung. *Almanach der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften* (54): pp. 281-296.
- Schuchardt, Hugo. (1909) Die Lingua franca. *Zeitschrift für romanische Philologie* 33, pp. 441-

461.

Sebba, Mark. (1997) *Contact Languages*. Houndmills: MacMillan.

Stokoe, William C. (1960) *Sign Language Structure: An Outline of the Visual Communication Systems of the American Deaf*. (Studies in Linguistics. Occasional Paper; 8). Buffalo, NY: University of Buffalo.

Telle-Bouvier, Pierre. (2008) *Ĉu Esperanto estas fundamente facila?* Limoges: Telle-Bouvier.

Thomason, Sarah G. (2001) *Language Contact: An Introduction*. Washington, D. C.: Georgetown University Press.

Thomason, Sarah G. & Terrence Kaufman. (1988) *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley: University of California Press.

Todd, Loreto (1975) Pidginisation: a worldwide phenomenon. In Lynch, John (ed.) *Pidgins and Tok Pisin*, Occasional paper no. 1, pp. 1-20, s.l.: University of Papua New Guinea

Trudgill, Peter. (1995) *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*, (new edition). London: Penguin.

Versteegh, Kees. (1993) Esperanto as a first language: Language acquisition with a restricted input. *Linguistics* 31, pp. 539-555

白井裕之 (2009) 「媒介言語を「創出」する試み－計画言語の社会学」木村護郎クリストフ・渡辺克義編『媒介言語論を学ぶ人のために』第4章, pp. 82-103, 世界思想社.

木村護郎クリストフ (2005) 『言語にとって「人為性」とはなにか：言語構築と言語イデオロギー：ケルノウ語・ソルブ語を事例として』東京：三元社.

木村護郎クリストフ・渡辺克義編 (2009) 『媒介言語論を学ぶ人のために』京都：世界思想社.

後藤斉 (1987) 「エスペラントとヨーロッパ諸語の類似について」『エスペラント』55 (9月号), pp. 7-8.

後藤斉 (2009) 「言語学の中の計画言語論」木村護郎クリストフ・渡辺克義編『媒介言語論を学ぶ人のために』, 第12章, pp. 254-274, 京都：世界思想社.

佐々木嗣也 (2009) 「エスペラントのユダヤ的背景」木村護郎クリストフ・渡辺克義編『媒介言語論を学ぶ人のために』第14章, pp. 297-311, 京都：世界思想社.

新村出 (1972) 「ドレスデン大会の思い出」『新村出全集第十四巻』pp. 330-335, 東京：筑摩書房.

タニヒロユキ (2009) 「計画言語の類型論」木村護郎クリストフ・渡辺克義編『媒介言語論を学ぶ人のために』第13章, pp. 275-296, 京都：世界思想社.

和田祐一 (1973) 「クレオール考：フランス語を中心に」『人文論究』23(1), pp. 19-42.